

箱崎 61

—箱崎遺跡第97次調査報告—

2021

福岡市教育委員会

箱崎 61

—箱崎遺跡第97次調査報告—



2021

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、歴史的遺産が数多く残されており、それらを保護し、後世に伝えることはわたしたちの重要な責務であります。

しかしながら、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実です。そのため本市では、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録を残すことで後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、箱崎遺跡第97次調査について報告するものです。本調査では、中世の町屋跡を示す井戸や柱穴などがみつかり、当時の町屋の配置や町割りを考えるうえで重要な成果を得ました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、福岡県信用組合様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市東区箱崎一丁目 2535、2534、2560 の店舗建設工事に先立ち、令和元（2019）年度に実施した箱崎遺跡第 97 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 本書の執筆は第IV章を小林克也（パレオ・ラボ）、そのほかおよび編集を神啓崇が担当した。
4. 本書の遺構・遺物実測図、拓影、製図は神が担当した。
5. 本書の遺構・遺物写真は神が撮影した。
6. 本書の遺構実測図中の方位はすべて座標北である。
7. 本書掲載の座標は世界測地系で、標高は街区多角点 20D36 (H = 2.964 m) を基準とした。
8. 検出遺構は、検出順に通し番号を付けた。
9. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SD 溝　SE 井戸　SK 土坑　SP 柱穴　SX 不明遺構
10. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開する予定である。大いに活用していただきたい。
11. 本文中の陶磁器分類は以下の文献に拠る。
宮崎亮一編 2000『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』(太宰府市の文化財 第49集)

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	97 次	調査略号	HKZ-97
調査番号	1917	分布地図図幅名	箱崎	遺跡登録番号	2639
事業対象面積	1268.06m ²	調査面積	256m ²	事前審査番号	30-2-1008
調査期間	令和元（2019）年 6 月 17 日—同年 8 月 9 日				
調査地	福岡市東区箱崎一丁目 2535、2534、2560				

本文目次

第Ⅰ章 はじめ	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	2
1. 遺跡の立地	2
2. 遺跡の歴史的環境	2
3. 周辺の調査	2
第Ⅲ章 発掘調査の記録	4
1. 調査の経過と概要	4
2. 遺構と遺物	6
(1) 井戸	6
SE001	6
SE022	8
SE025・026	10
SE040	10
SE085	12
(2) 土坑	12
SK017	12
SK027	12
SK038	12
SK104	14
(3) その他の遺物	14
第Ⅳ章 自然科学分析－箱崎遺跡第97次調査出土木製品の樹種同定－（小林克也）	16
第Ⅴ章 総括	18
1. 本調査地点の成果	18
2. 井戸の検討	18

挿図目次

図 1 箱崎遺跡調査地点位置図 (S=1/8000)	3
図 2 第97次地点調査区位置図 (S=1/500)	4
図 3 遺構配置図 (S=1/100)	5
図 4 SE001 遺構実測図 (S=1/40)	6
図 5 SE001 土層図 (S=1/40)	7
図 6 SE001 井戸枠出土遺物実測図 (S=1/3)	7
図 7 SE001 挖方出土遺物実測図 (S=1/3)	7
図 8 SE001 挖方・その他出土遺物実測図 (S=1/3)	8
図 9 SE022 遺構実測図 (S=1/40)	8
図 10 SE022 土層図 (S=1/40)	9
図 11 SE022 出土遺物実測図 (S=1/3)	9
図 12 SE025・SE026 遺構実測図・土層図 (S=1/40)・SE025 出土遺物実測図 (S=1/3)	10
図 13 SE040 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	11

図 14	SE085 遺構実測図 (S=1/40)	12
図 15	SE085 出土遺物実測図 (S=1/3)	12
図 16	SK017 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	13
図 17	SK027 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	13
図 18	SK038 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	13
図 19	SK104 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	13
図 20	その他の遺物実測図 (S=1/3)	15

表 目 次

表 1	出土木製品の樹種同定結果	16
表 2	箱崎遺跡第 97 次調査出土木製品の樹種同定結果一覧	16
表 3	遺構一覧	19

写 真 図 版 目 次

Ph.1	144	14
Ph.2	146	14
Ph.3	115	14
Ph.4	157	14
Ph.5	箱崎遺跡第 97 次調査出土木製品の光学顕微鏡写真	17
Ph.6	調査区全景（南西から）	21
Ph.7	調査区全景（南西から）	22
Ph.8	SE001 完掘状況（北から）	23
Ph.9	SE001 井戸鉢（北から）	23
Ph.10	SE022 井戸鉢 2（東から）	23
Ph.11	SE022 完掘状況（南西から）	23
Ph.12	SE025・026（北から）	24
Ph.13	SE040 完掘状況（東から）	24
Ph.14	SE040 井戸鉢（東から）	24
Ph.15	SE085 井戸鉢（北西から）	24
Ph.16	SE085 完掘状況（北西から）	25
Ph.17	滑石製錘集合	25
Ph.18	軽石製浮集合	25
Ph.19	玩具集合	25
Ph.20	1	26
Ph.21	62	26
Ph.22	97	27
Ph.23	114	27
Ph.24	135	28
Ph.25	133	28
Ph.26	145	28

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、東区箱崎一丁目 2535、2534、2560 の店舗建設に伴う埋蔵文化財有無の照会（申請番号 30-2-1008）を平成 31 年 1 月 22 日付で受理した。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡内にあり、周辺で数次の発掘調査を実施しているため、申請地内でも遺構の存在が推測された。これを受け、埋蔵文化財課事前審査係が平成 31 年 2 月 15 日・2 月 21 日に確認調査を実施し、現地表面下 0.7 ~ 0.95 m で中世の遺構を確認した。このため、遺構の保全等に関して申請者と協議したが、予定建築物の構造上、埋蔵文化財への影響が回避できないため、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和元年 5 月 17 日付で福岡県信用組合を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 6 月 17 日から 8 月 9 日に発掘調査、令和 2 年度に資料整理および報告書作成を実施した。

申請地 1268.06 m² のうち、調査対象は工事で埋蔵文化財に影響がある 276.57 m² である。

調査にあたっては、福岡県信用組合様および近隣の方々からご理解をいただくとともに、多大なご協力を賜りました。記して深謝いたします。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会

調査委託 福岡県信用組合

〔発掘調査 平成 31・令和元年度〕

調査総括 福岡市経済観光文化局文化財活用部

埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
--------	----	-------

埋蔵文化財課	調査第 1 係長	吉武 学
--------	----------	------

調査庶務 文化財活用課 管理調整係長

藤 克己

文化財活用課	管理調整係	松原 加奈枝
--------	-------	--------

事前審査 埋蔵文化財課 事前審査係長

本田 浩二郎

埋蔵文化財課	事前審査係主任文化財主事	田上 勇一郎
--------	--------------	--------

埋蔵文化財課	事前審査係文化財主事	朝岡 俊也
--------	------------	-------

調査担当 埋蔵文化財課 調査第 1 係文化財主事

神 啓崇

〔整理・報告 令和 2 年度〕

整理・報告総括 福岡市経済観光文化局文化財活用部

埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
--------	----	-------

埋蔵文化財課	調査第 1 係長	吉武 学
--------	----------	------

整理・報告庶務 文化財活用課 管理調整係長

大森 秋子

文化財活用課	管理調整係	松原 加奈枝
--------	-------	--------

事前審査 埋蔵文化財課 事前審査係長

本田 浩二郎

埋蔵文化財課	事前審査係主任文化財主事	田上 勇一郎
--------	--------------	--------

埋蔵文化財課	事前審査係文化財主事	山本 晃平
--------	------------	-------

整理・報告担当 埋蔵文化財課 調査第 1 係文化財主事（～10 月） 神 啓崇

事前審査係文化財主事（10 月～）

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地

箱崎遺跡は、博多湾と日々良川河口の日々良潟の間にある細長い砂州上に立地する。この砂州は「箱崎砂層」と呼ばれる新砂丘砂層で形成され、海浜砂と風成砂部分からなる。石英質ないし真砂質で粗粒砂の場合が多い。砂層の形成開始時期は、繩文海進極盛期の高海面期後の相対的な小海退期とみられる（下山 1998）。

発掘調査で検出した砂丘の標高から旧地形を復元すると、遺跡の中央付近を頂点として、東西にゆるやかに下降する南北方向の尾根線があるとわかる。これが現在の街区にはぼ沿うように宮崎宮付近まで伸びている。この南側には浅い谷状の鞍部を挟んで標高 2.5 ~ 3.5m の安定した高所がある（中尾 2018a・b）。

また、九州大学箱崎キャンパス内の地質調査によれば、当該地は AD1060 年以降 AD1281 年以前に地層の堆積速度が急に増大していることがわかり、この時期に洪水によって河川から砂が大量供給され、砂州が急成長したという（市原・下山 2019）。

2. 遺跡の歴史的環境

遺跡全体の検討（久住編 2019・佐藤 2013・中尾 2018a・b）をもとに概略を述べる。

弥生時代から古墳時代は、部分的に集落・墓が営まれるが小規模で散発的である。集落の本格的な展開は、宮崎宮の創建が契機となる。『宮崎宮縁起』によれば、創建は 921 年頃で、飯塚市大分八幡宮から遷座し、大宰少弐藤原真材が造立にあたったことがわかる（重松 2018:p.26）。創建前後の 10 ~ 11 世紀前半は、遺跡南東部に集落が広がり、越州窯系青磁碗やイスラム陶器、石帶巡方、大宰府や鴻臚館との関わりを示す瓦類が出土している。11 世紀後半～12 世紀前半には、井戸や土坑の数が増加し、貿易陶器・墨書き陶器が多く出る。とくに墨書き陶器は遺跡北西部に集中し、「宮寺縁事抄」の記録にあるような宋人の居住が想定される。12 世紀中～13 世紀前半には、遺跡全域に集落が展開する。鉄やガラスを集落内で生産した痕跡もみられる。元寇前後～室町時代にあたる 13 世紀後半～16 世紀には、引き続き遺跡全域で生活痕跡が確認できるが、15 世紀以降は遺構が少ない。文永の役では宮崎宮が焼失しており、13 世紀後半頃の焼土層や被熱陶器の出土を元寇の戦災による痕跡とみる意見もある。

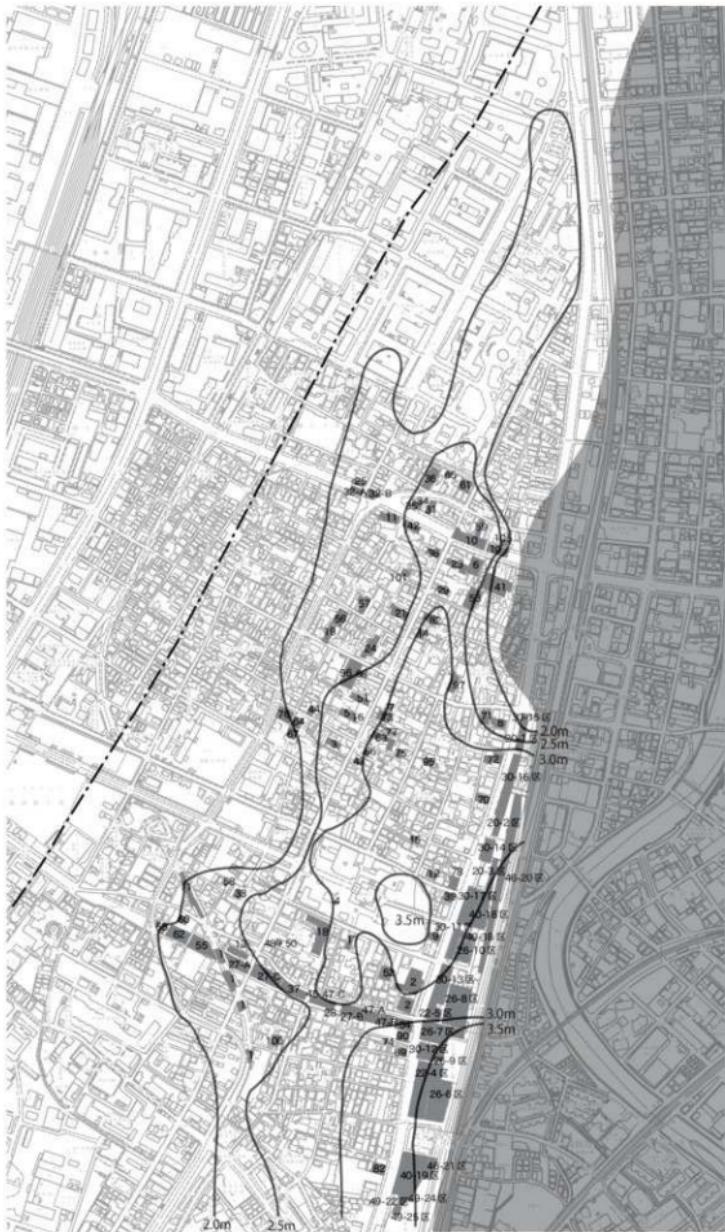
3. 周辺の調査

8 次調査（田上勇一郎編 1999『箱崎 7』福岡市埋蔵文化財調査報告書 591 集）

中世から近世の井戸・溝・土坑などを検出している。このほかに古墳時代前期（とくに 3 世紀後葉～4 世紀前葉）の竪穴建物跡や土坑を検出した。竪穴建物からは古式土師器が出ており、畿内や瀬戸内、韓半島南部からの搬入品も含む。土坑からは飯蛸壺がまとまって出土した。集団の生業をあらわす遺物で、出土状況から、一時的な収納か祭祀の可能性がある。

71 次調査（荒牧宏行編 2018『箱崎 53』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1343 集）

10 ~ 11 世紀の梵鐘を鋳造した遺構が見つかり、鋳型や溶解炉が出土した。宮崎宮の創建時期とおおむね一致し、宮崎宮から 300 m 程の近い距離にあるため、宮崎宮や神宮寺の梵鐘をつくった工房跡の可能性がある。このほか、中世から近世の土坑や柱穴、井戸を検出した。



中尾祐太作成に加筆・改変。調査区の位置・範囲は厳密ではない。九州大学構内の調査地点を除く。
図1 箱崎遺跡調査地点位置図 (S=1/8000)

第Ⅲ章 発掘調査の記録

1. 調査の経過と概要

第97次調査地点は箱崎遺跡の北東に位置し、現況は店舗であった。道路との比高差ではなく、地表面の標高は概ね3.7mである。調査範囲は対象地中央に建設する店舗の工事範囲である。確認調査では、地表面下0.7～0.95mで遺構が見つかっている。この成果をふまえ、調査着手前に重機で表土搅乱土（地表面から1m程度）を掘削した。申請地内に十分な土置き場が確保できたため、調査区全体を一度に掘り下げた。山留めはオープンカットによる。搅乱土下で褐色砂層となり、その上面で遺構を検出した。検出面の標高は概ね2.5～3mで、1面の調査である。検出遺構は中世の井戸、土坑、柱穴、溝で、遺物は土師器、陶磁器、瓦器、石製品などパンケース11箱分出土した。遺構面は既存建物の基礎や解体時の掘削で部分的に搅乱を受けていた。なお、包含層は確認できなかった。

遺構実測は、調査区の形状にあわせて任意に設定した基準線を元に1/20平面実測をし、申請書の現況図に挿入した。標高は街区多角点20D36(H=2.964m)から移動した。写真撮影は35mm判モノクロフィルム、6×7判モノクロ・リバーサルフィルムのほか、デジタルカメラを用いた。



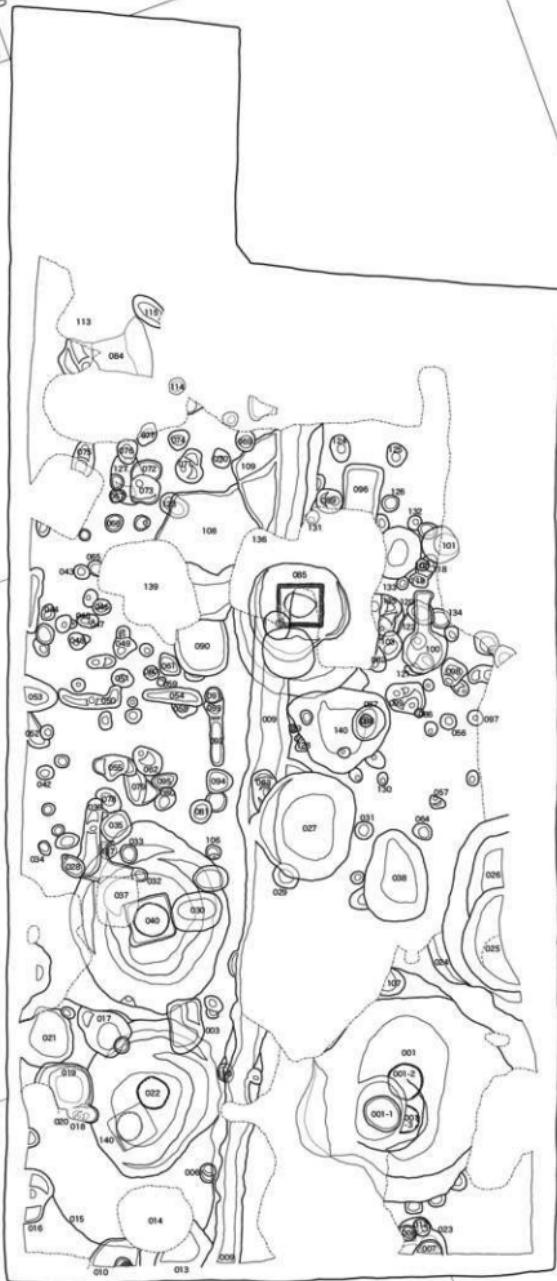


図3 遺構配置図 (S=1/100)

2. 遺構と遺物

(1) 井戸

計8基検出し、江戸時代以降のSE014を除く7基を報告する。

SE001(図4～8・Ph.8・9) 調査区南東際で検出した。遺構検出時点で井戸枠と掘方のプランが明瞭に見えた。標高0.6mまで掘削すると、検出時点の井戸枠のほかに2基の井戸枠を検出した。以降、井戸枠は切り合いの新しいものからSE001-1→SE001-2→SE001-3と順に番号を付けている。SE001-2、SE001-3は井戸枠材の木製桶を確認したが、遺存状態は良くない。比較的残りの良いSE001-2の木材は、樹種同定分析で針葉樹と判明した(第IV章参照)。

1～12は井戸枠出土遺物である。1は青白磁碗で底部に墨書きあり。最下層出土。2は染付碗。3は白磁紅皿。完形品。4は龍泉窯系青磁碗。椀II a類。5は黄褐釉鉄絵盤。底部に墨書きがある。花押か。6は白磁碗。7は青磁碗転用の瓦玉。8は瓦質土器の脚部。ナデ、ユビオサエ痕あり。9は土師器椀。回転ナデ後内面・胴部外面下部ミガキ。内面の一部にスス付着。10は土師器皿。底部糸切。11は弥生土器蓋の底部。ローリングを受け、全体が摩滅。黒化している。12は滑石製錘。十字に線刻を施す。側面に加工痕あり。13～36は掘方出土遺物。13～20は土師器環・皿で、13～15は底部ヘラ切、その他は糸切。17・18・20は回転ナデ後見込みに静ナデを施す。21は天目碗。22は瓦器椀。ナデ後ミガキ。23は青磁碗。暗オリーブ色。内外面に施釉。24は青白磁皿。25は同安窯系青磁碗。碗I -1a類。26は龍泉窯系青磁皿で、皿I -2類。27・28は同安窯系青磁皿。27は底部に目跡の砂が残る。29は土師質土器鍋。ナデ後ハケ。口縁上面に押圧文を施す。外面にスス付着。把手を欠損する。30～32は土錘。30は完形で、外面の一部にスス付着。32は外面にヘラで「×」印を施す。33は砂岩質石球。ケズリ後叩打調整。底部に平坦面あり。外面はやや風化する。34は白色軽石。河原石。35は弥生土器蓋の口縁部片。摩滅が激しく調整不明瞭。36は丸瓦。内面に吊組痕あり。37～39は土錘。井戸枠・掘方いずれも含む。

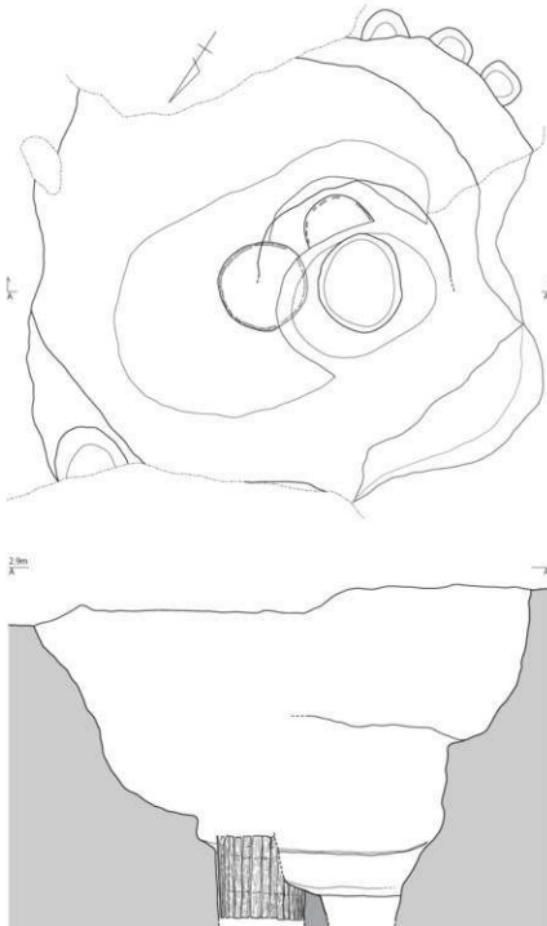


図4 SE001 遺構実測図 (S=1/40)

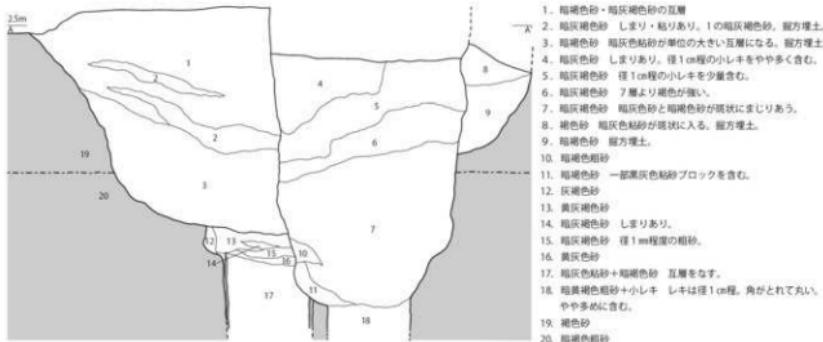


図5 SE001 土層図 (S=1/40)

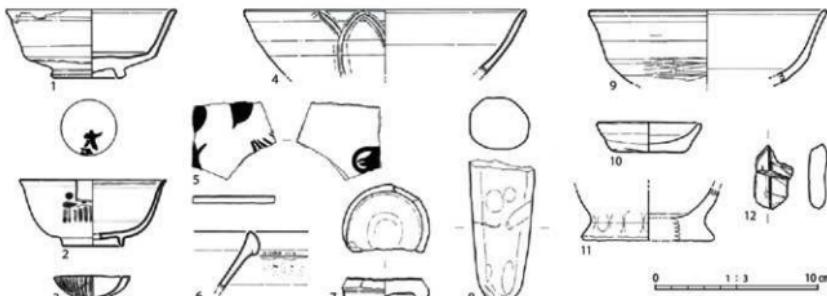


図6 SE001 井戸枠出土遺物実測図 (S=1/3)

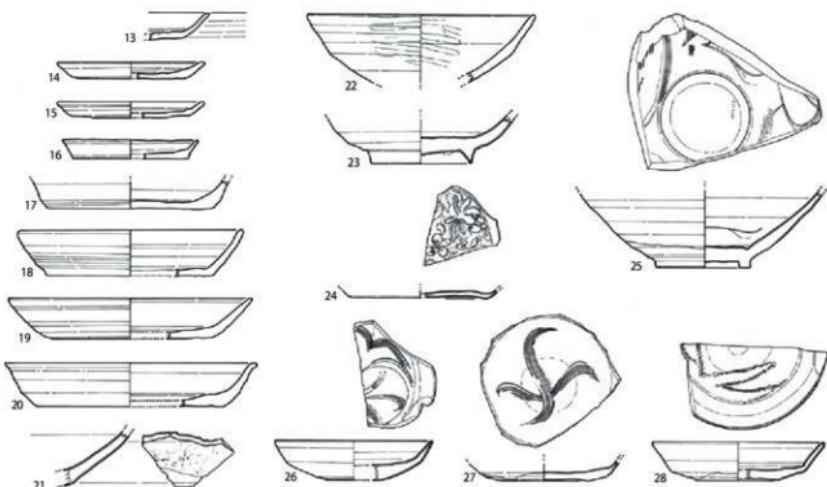


図7 SE001 掘方出土遺物実測図 (S=1/3)

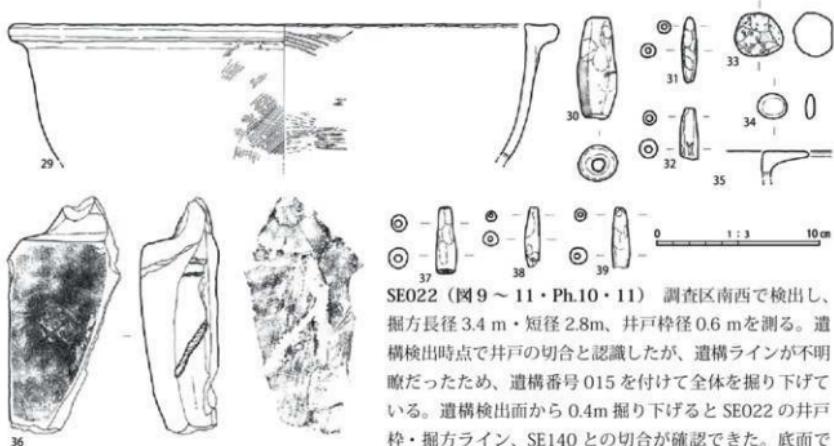


図8 SE001 挖方・その他出土遺物実測図 (S=1/3)

SE022 (図9～11・Ph.10・11) 調査区南西で検出し、掘方長径3.4m・短径2.8m、井戸枠径0.6mを測る。遺構検出時点で井戸の切合と認識したが、遺構ラインが不明瞭だったので、遺構番号015を付けて全体を掘り下げている。遺構検出面から0.4m掘り下げるときSE022の井戸枠・掘方ライン、SE140との切合が確認できた。底面では当初から認識していた井戸枠のほかに、1基の井戸枠を検出し、井戸枠2とした。SE140は壁面崩落の危険を考慮し、未完掘である。40～42・46・47は井戸枠出土。40～42は土師器皿・壺。40・41は底部糸切で、回転ナデ後、見込みに静止ナデを施す。40は内面に墨が付着。42は底部ヘラ切で、回転ナデ後、見込みに強い静止ナデを施す。43～45は井戸枠2出土土師器皿。43・44は底部ヘラ切。44は回転ナデ後見込みに静止ナデ。底部から胴部外面向一部にスヌ付着。45は底部糸切。46は土球。47は滑石製錘で石錘の転用品。48～50は井戸枠・掘方いずれも含む。48は土球。橙色で焼成良好。49は軽石製浮。表・裏両面に紐痕跡あり。50は滑石製錘。石錘の転用品で、外面向一部にスヌ付着。51～63は掘方出土。51は土師器椀。回転ナデ後ミガキ。摩滅でミガキ不明瞭。52～54・56～59土師器壺・皿。52～54は底部ヘラ切。56～59は底部糸切。52は回転ナデ後胴部外面向下半ユビオサエ。焼成やや不良で、胴部に穿孔あり。54は内外面向一部にスヌ付着。56は回転ナデ後、見込みに軽い静止ナデ。57・58は強い静止ナデを施す。58・59は胴部を打ち欠く。58の内面には全体にスヌ付着。60・61は白磁碗。60の見込みに砂目跡あり。62・63は同安窯系青磁碗。62はI-1b類、63はIII-2類で胴部外面向別個体が軸着する。64は土錘。焼成不良。

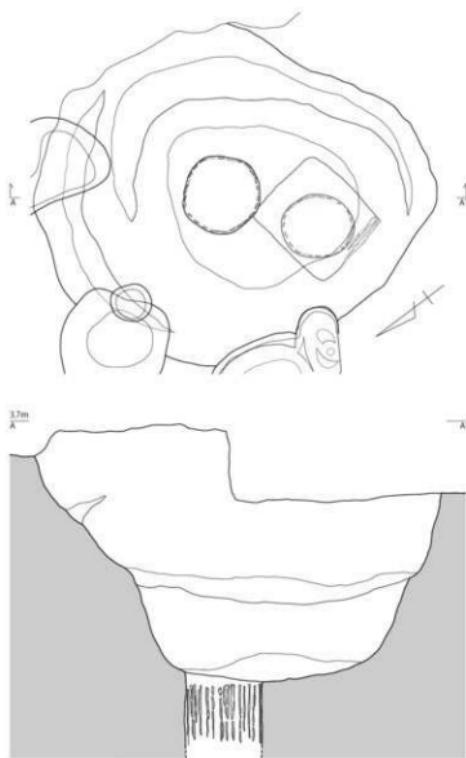


図9 SE022 遺構実測図 (S=1/40)

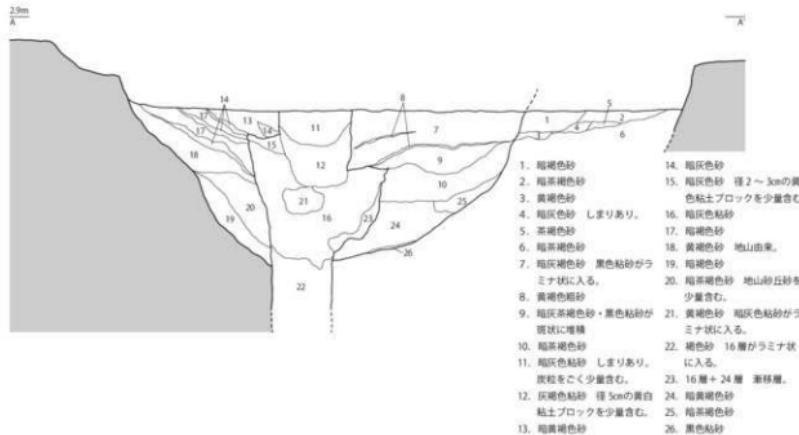


図 10 SE022 土層図 (S=1/40)

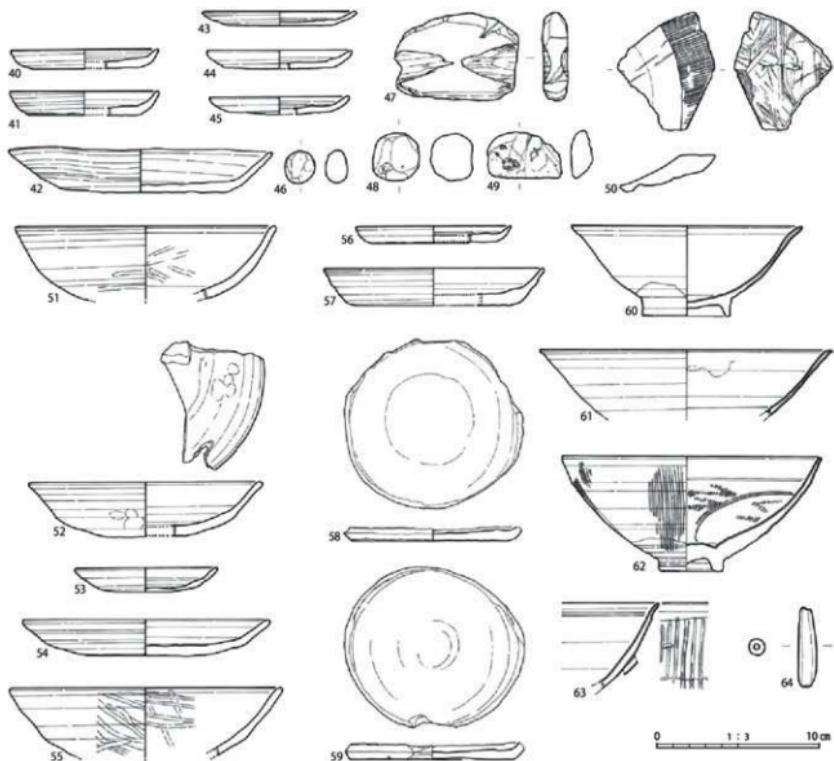


図 11 SE022 出土遺物実測図 (S=1/3)

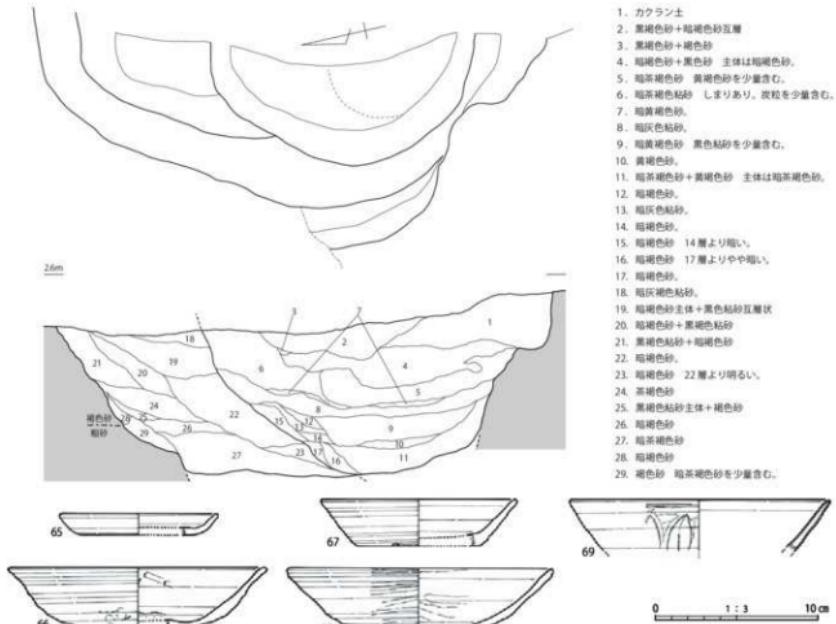


図 12 SE025・026 遺構実測図・土層図 (S=1/40)・SE025 出土遺物実測図 (S=1/3)

SE025・026 (図 12・Ph.12) 調査区南側で検出した。平面では切り合いが確認できず当初は1つの井戸と考え掘り下していたが、調査区壁面の土層観察で切り合いが判明した。壁面崩落の危険性を考慮し未完掘である。65～69はSE025出土遺物。65～67は土師器環・皿。65は底部へラ切り。66は回転ナデ後内面ヘラミガキ。見込みに粘土接合痕あり。外面にスス付着。67は口縁の一部のみで、反転復元作図のため口径は正確さを欠く。68は瓦器椀。焼成やや不良。69は龍泉窯系青磁碗。SE026では土師器皿が出ているが、いずれも小片のため図化していない。

SE040 (図 13・Ph.13・14) 調査区西側で検出し、掘方長径3.9m、掘方短径3.25mを測る。井戸枠は一辺0.9mの正方形枠に直径0.7mの桶を配する。検出当初から井戸枠・掘方が明確で、井戸枠埋土は黒色シルト質土、掘方埋土は暗褐色砂である。井戸枠の桶木材は残存状態が悪く、取り上げていない。70～78は井戸枠、79～87は掘方、88～90は井戸枠・掘方区分なし出土。70は滑石製鍾。表面に十字の刻みあり。転用品。71は土師器皿。回転ナデ後、みこみに静止ナデを施す。底部へラ切。72は土師器環で、回転ナデ後、内面にミガキを施す。底部へラ切。内外面にスス付着。73は土師器椀。摩滅で調整不明瞭。回転ナデ後、ミガキか。74は瓦器椀で、回転ナデ後ミガキを施す。口縁内外にスス付着。75は白磁碗。内外に釉を施すが、内面は特に厚い釉垂。76は白磁碗転用の瓦玉。77は褐釉陶器瓶。作図は反転復元で、接合関係も図上復元のため不正確である。78は平瓦。79は平瓦転用瓦玉。80は滑石製容器用栓。外面にスス付着。鍾に転用か。81は土球。灰白色で焼成良。82～85は土師器皿。82～85は底部へラ切で、83・84は回転ナデ後みこみに静止ナデを施す。86は平瓦。色調は青灰・暗褐色。内面に吊紐らしき痕跡あり。87は砂岩質砥石。やや黄色みのある灰色で、石材中に黒色鉱物を少量含む。88は白磁碗。89は白磁皿VI B類。緑白色。90は土錘。このほか、掘方の未図化資料には、土師器皿（へラ切）、土師器椀、土師質土器、須賀質土器、鉄釘などがある。図化・未図化とともに掘方の土師器皿・环はへラ切であることから、開削時期は概ね11世紀後半を想定する。

1. カクラン土
2. 黒褐色砂+暗褐色砂互層
3. 黒褐色砂+褐色砂
4. 暗褐色砂+黑色砂 主体は暗褐色砂。
5. 暗茶褐色砂 黄褐色砂を少量含む。
6. 暗茶褐色砂 しまりあり。皮粒を少量含む。
7. 暗褐色砂。
8. 暗灰色砂。
9. 暗黃褐色砂 黃色粘砂を少量含む。
10. 黄褐色砂。
11. 暗茶褐色砂+黄褐色砂 主体は暗茶褐色砂。
12. 暗褐色砂。
13. 暗灰色砂。
14. 暗褐色砂。
15. 暗褐色砂 14層より高い。
16. 暗褐色砂 17層よりやや低い。
17. 暗褐色砂。
18. 暗灰褐色砂。
19. 暗褐色砂+黒色粘砂互層
20. 暗褐色砂+黒褐色砂
21. 黒褐色砂+暗褐色砂
22. 暗褐色砂。
23. 暗褐色砂 22層より明るい。
24. 黒褐色砂
25. 黒褐色砂+主体+褐色砂
26. 暗褐色砂
27. 暗茶褐色砂
28. 暗褐色砂
29. 褐色砂 暗茶褐色砂を少量含む。

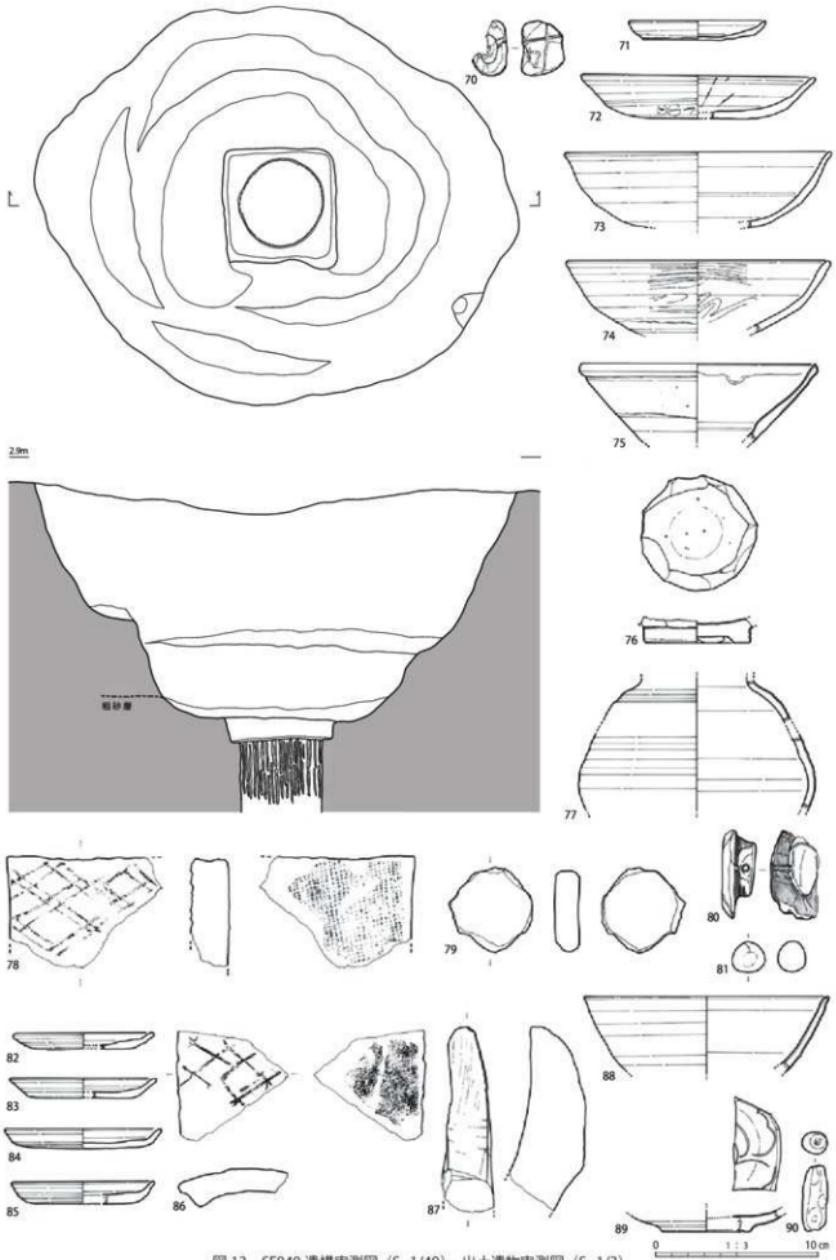


図13 SE040 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

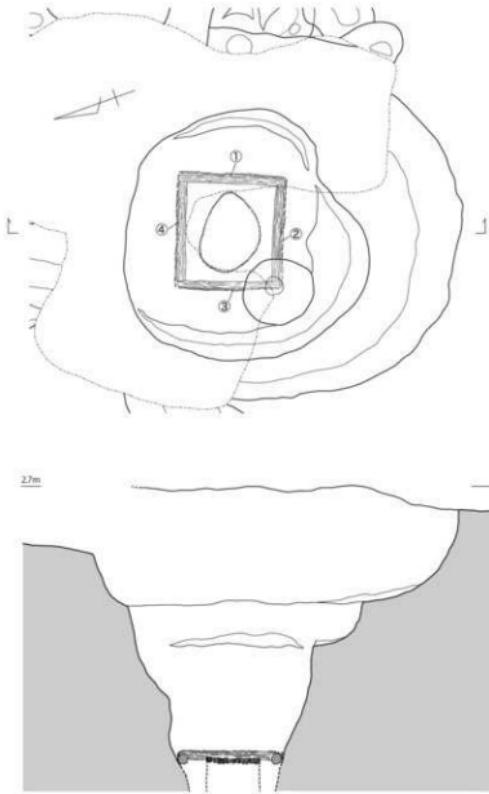


図 14 SE085 遺構実測図 (S=1/40)

でスギと判明した。井戸枠が不明瞭だったため、木材を検出したレベルまで全体を掘り下げる。よって遺物は井戸枠と掘方が混在する。91～94は土師器皿。91は端部を蕨手状に折り曲げる。底部糸切。92～94はいずれもヘラ切。92は回転ナデ後みこみに静止ナデを施す。95～98は土師器壺。95は底部糸切で、底に板状痕あり。96・97は回転ナデ後みこみに静止ナデを施す。底部糸切。97は底部に板状痕があり、内面の一部にスス付着。98は回転ナデ、外面下半にユビオサエ、内面は工具ナデを施す。99は土師器高台付椀。

(2) 土坑

SK017 (図 16) 調査区北で検出し、長径 1.16m、短径 0.9m を測る。埋土は暗灰色粘質砂で、しまりあり。炭粒(大)を少量含む。底部はやや掘り過ぎている。100～109は土師器皿。いずれも底部糸切で、回転ナデ後みこみに静止ナデを施す。100・102・103・105は底部に板状痕あり。110は青磁壺。

SK027 (図 17) 調査区中央で検出し、径 2.2m を測る。埋土はしまりのある暗灰色粘砂と暗褐色砂の互層である。111は白磁小碗で、底部に墨書きあり。112・113は土師器皿。112は回転ナデ後みこみに静止ナデを施す。底部糸切で板状痕あり。114は龍泉窯系青磁皿 I 類。115は滑石製容器。外面四方に線刻あり。以上から時期は 12 世紀中～後半を想定する。

SK038 (図 18) 調査区中央東寄りで検出し、長軸長 1.88m、短軸長 1.28m を測る。116は土師器皿。回転ナデ後みこみに静止ナデ。底部糸切。このほか瓦器椀、捕鉢の小片が出ている。

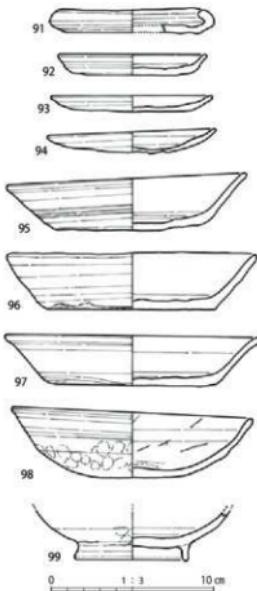


図 15 SE085 出土遺物実測図 (S=1/3)

SE085 (図 14・15・Ph.15・16) 調査区北で検出した。搅乱やほかの遺構に切られる。井戸枠は方形に木材を組み、その中央に曲物を据える。方形枠は最下面の一段のみ残る。これらは残存状態が良好だったため、番号は付け取り上げた。木材②は樹種同定分析



図 16 SK017 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

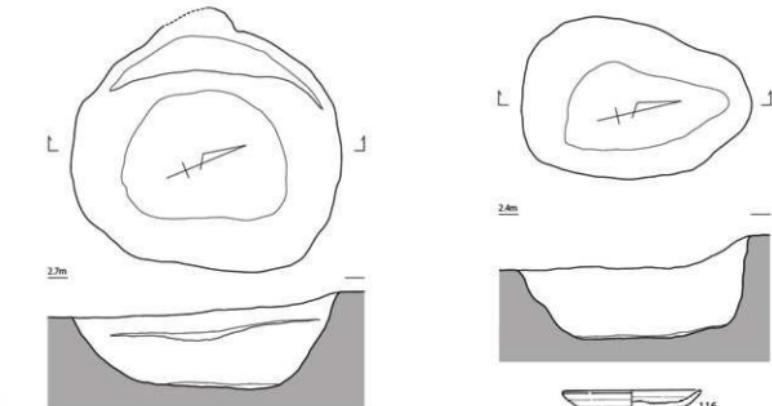


図 18 SK038 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

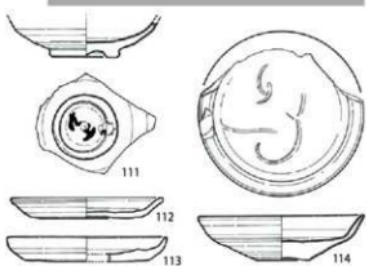


図 17 SK027 遺構実測図 (S=1/40)
・出土遺物実測図 (S=1/3)

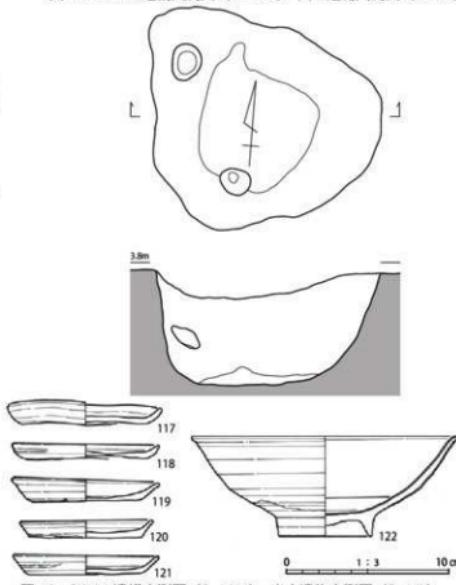


図 19 SK104 遺構実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

SK104（図19） 調査区中央で検出し、長軸長1.8m、短軸長1.68mを測る。埋土は黒褐色砂・暗褐色砂・暗茶褐色砂・暗褐色砂の順にレンズ状堆積する。117～121は土師器皿でいずれも完形品。回転ナデ後みこみに静止ナデを施す。底部糸切で、117・118・121は底部に板状痕あり。122は白磁碗で、椀V-4a類。以上から時期は12世紀中～後半を想定する。

(3) その他の遺物

123～131は土師器皿・壺。完形品を中心に図化した。123～125・128・129は底部ヘラ切、ほかは底部糸切。132は土師器椀で、玉縁口縁の白磁碗を模した形態である。133は黒色土器。外面に炭素を吸着させ、内面に丁寧なミガキを施す。134は黒褐釉陶器壺。口縁内面に降灰。135は天目碗で残存8割。136・137は瓦玉。136は白磁碗、137は青磁碗の転用である。138は瀬戸焼の卸皿。外面に施釉。139は備前系の甕。140・141は白磁碗。141は淡青灰色を呈する。142は完形品の土鍤。胎土は径1mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成良。143は土球。144はダルマ土人形。型作りで胴部前面と背面を別造りし、結合する。頭部に長方形の隙間があり、貯金箱か。背面には持ち主と思しき個人名の墨書きあり。同じ搅乱から薄パンケース1箱分出土している。145はガラス瓶。ガラス内に気泡が目立つ。肩部に「製造本舗カンサイ蠅取紙會社」・「強力殺虫液イチゲキ」の文字あり。146は砂岩製の砥石。基本的に灰色だが、被熱で赤紫色の部分もある。部分的にススが付着。147～150は軽石製の浮。胴部に刻みあり。151～153は碁石。151は暗灰色で玄武岩製。斜長石斑晶をやや多く含む。152・153は灰色の河原石。154は滑石製温石の転用品。155は石球。灰白色で表面を研磨して整形する。156は磨石。157は金属製バッジ。「宮幼」とあり、宮松幼稚園のことか。



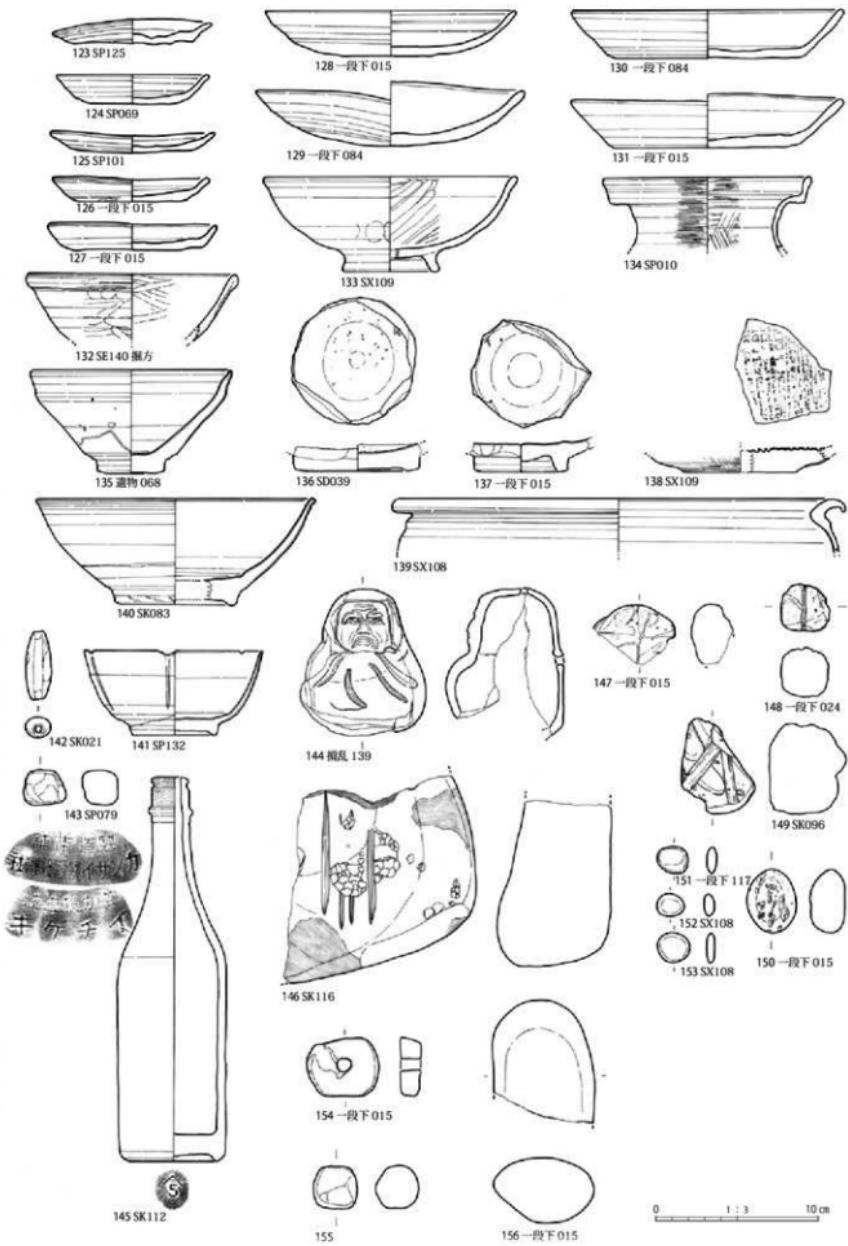


図 20 その他の遺物実測図 (S=1/3)

第IV章 自然科学分析—箱崎遺跡第97次調査出土木製品の樹種同定—

小林 克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

博多湾岸の砂丘上に立地する箱崎遺跡の第97次調査で出土した木製品の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は井戸跡 SE001-2 から出土した桶側板 1 点と、SE085 から出土した井戸枠 4 点の、計 5 点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のスギが 1 点、針葉樹までの同定にとどまった試料が 4 点であった。同定結果を表 1 に、一覧を表 2 に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 Ph.5 1a-1c(No.3)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 2 ~ 15 列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(2) 針葉樹 Coniferous-wood Ph.5 2a-2c(No.1), 3a-3c(No.5)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。放射組織は単列である。劣化が激しく、分野壁孔が溶解し、形状が確認できなかったため、針葉樹までの同定にとどめた。

4. 考察

SE001-2 の桶側板は針葉樹、SE085 の井戸枠はスギと針葉樹であった。スギを含めた針葉樹は、木理直で真っすぐに生育し、加工性が良い樹種である（伊東ほか, 2011）。井戸の構成部材には、真っすぐで加工性の良い針葉樹が選択的に利用されたと考えられる。

福岡県内で確認されている鎌倉時代頃の井戸構成部材では、スギやヒノキを含めた針葉樹材が多く利用されており（伊東・山田編, 2012）、今回の箱崎遺跡の井戸構成部材も同様の傾向を示した。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌。238p, 海青社。

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース。449p, 海青社。

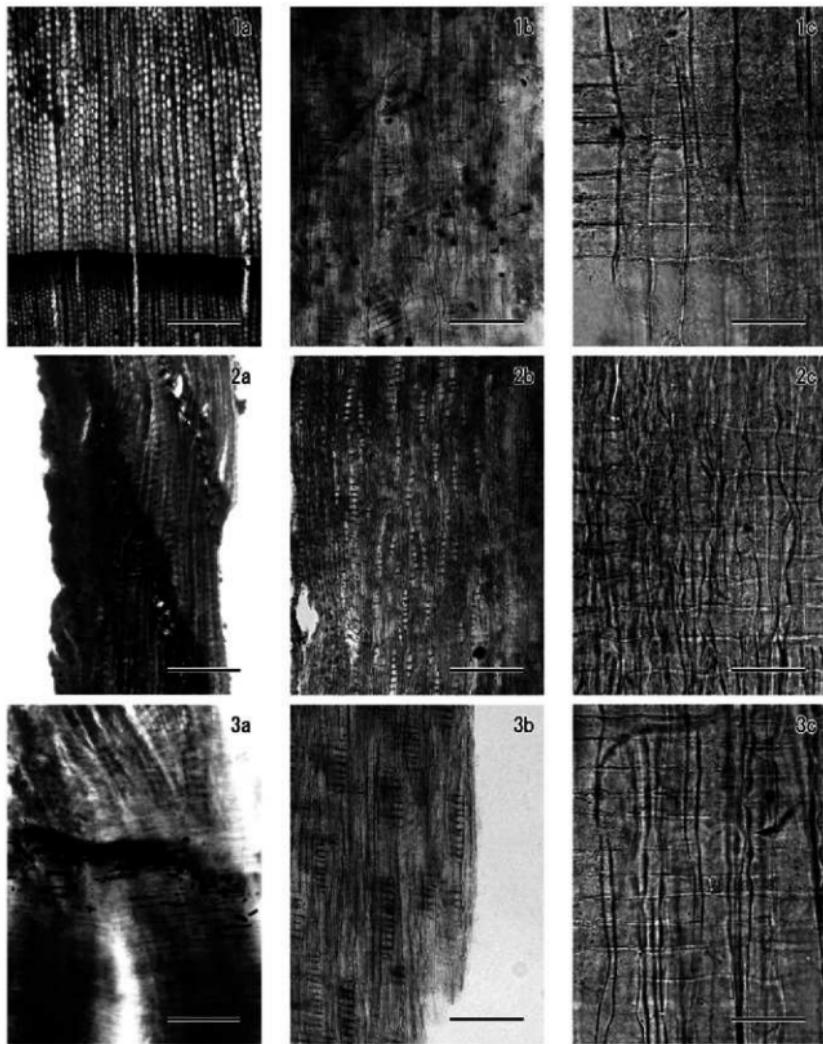
表 1 出土木製品の樹種同定結果

樹種 / 器種	桶側板	井戸枠	合計
スギ		1	1
針葉樹	1	3	4
合計	1	4	5

表 2 箱崎遺跡第97次調査出土木製品の樹種同定結果一覧

試料 No.	出土遺構	遺物 No.	器種	樹種	木取り
1	SE001-2		桶側板	針葉樹	板目
2	SE085	①	井戸枠	針葉樹	柾目
3	SE085	②	井戸枠	スギ	道柾目
4	SE085	③	井戸枠	針葉樹	柾目
5	SE085	④	井戸枠	針葉樹	柾目

※ SE085 の遺物 No. は図 14 の番号に対応する。



Ph.5 箱崎遺跡第97次調査出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c. スギ (No.3)

2a-2c. 針葉樹 (No.1)

3a-3c. 針葉樹 (No.5)

a: 横断面 (スケール = 500 μm)、b: 接線断面 (スケール = 200 μm)、c: 放射断面 (スケール = 50 μm)

第V章 総括

1. 本調査地点の成果

① 11世紀後半～12世紀代を中心とする井戸、土坑、柱穴を検出した。とくに井戸は調査区半分以上の面積を占め、当地の土地利用として井戸が主体となっていたとわかる。SE022の井戸枠2、SE040・SE085は11世紀後半～12世紀前半頃のもので、方形枠の中に曲物か桶を設置する。箱崎遺跡では、この時期の井戸（方形井戸枠）は遺跡南東側での検出が主体だったが、本調査地点の成果で北部でも当該期にまとめて井戸が展開すると判明した。

② 井戸枠利用木材の樹種同定分析で、SE001では針葉樹、SE085では針葉樹・スギと判明した。箱崎遺跡ではこれまでに37次SE226、45次SE012で井戸枠枠の樹種同定をしており、いずれもスギと判明している（植田2007）。それぞれ時期に差はあるが、同様な傾向を示すといえる。

2. 井戸の検討

箱崎遺跡の井戸は榎本義嗣（2003）・中尾祐太（2018a・b）の検討がある。榎本は井側・水溜の構造から、「丸太削り抜き材を用いるもの（A類）、横桟材等を用い方形の井側を組み、主として曲物を据えるもの（B類）、径60cm前後の木桶を用いるもの（C類）、石組みによるもの（D類）」、掘削形態から、「上面から底面までを一気に掘り下げる（底面中位に段を有するものも含む）（1類）、一旦平坦面を設けた上で、下部の水溜を据える土坑状の掘り込みを行なうもの（2類）」に分類した（榎本2003:p.70）。そのうえで、I期（10世紀前半～11世紀中頃）：A-1類、II期（11世紀後半～12世紀前半）：B類主体、III期（12世紀中頃～後半）：C類主体、IV期（13世紀～14世紀初頭）：C-2類主体、V期（14～16世紀）：C-2類主体・D類出現とする時期的変遷を捉えた。一方、中尾は井戸枠枠の桶に注目した。桶は、博多遺跡群では貿易物資の収納容器としてもたらされ、12世紀初頭以降に井戸枠として普及する（大庭2009）。箱崎でも同時に出現するため、博多とともに箱崎は対外貿易の影響を受けたと評価した。

本調査地点検出の井戸のうち、SE022の井戸枠2、SE040・SE085の井戸枠は方形枠の中に曲物か桶を設置する。この井戸枠は、博多遺跡群では8世紀以降11世紀代までみられる（菅波2008）。SE022やSE085は複数の掘り直しがあるので不確実だが、先行研究や博多の状況、井戸枠の遺物をふまえれば、時期は概ね11世紀後半～12世紀前半頃と想定できる。箱崎遺跡では、この時期の井戸（方形井戸枠）は遺跡南東側での検出が主体だったが、本成果で北部でも当該期にまとめて井戸が展開すると判明した。

また、本調査地点では井戸が集中し、調査区の半分以上を占める。27次調査A地点では、大学通りから敷地奥に向かって、「道路（側溝）→住居建物→土坑（ごみ穴など）→井戸」の遺構配置の規則性が判明している（中村編2004）。溝の時期からこの配置は13世紀代にさかのぼるという。この成果をふまえれば、本調査地点は町屋の裏庭にあたり、井戸が開削されたと想定できる。なお、箱崎の井水は中世以後、近世・近代でも良質の水が湧いており、明治期には日本三大蔬菜産地としての箱崎を支えた（古田2014など）。当時は地蔵松原の南に畠地が広がり、各所にハネツルベがあった。また、調査現場周辺の住民の方によれば、酒蔵もあったという。

参考・引用文献

- 市原季彦・山口一 2019「1. HZK1802 地点におけるジオライサー調査の成果」二醍一惟・谷吉子編『箱崎遺跡-HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点-付 HZK1802』
1803 地点調査報告書(九州大学理学文化創成調査室報告第2集) pp.118-130
橋山秀人 2007 「箱崎遺跡出土井戸枠の樹種同定」 中村祐太郎・古村哲也編『箱崎30』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第951集) pp.97-98
榎本義嗣 2003 「箱崎市現在の箱崎遺跡について」[中村市研究会 2003年九州大会 資料集] pp.65-74
大庭康雄 2009 「中世日本最大の貿易都市・博多遺跡群」(シリーズ「遺跡を学ぶ」061) 新星社
久住猛輔編 2019 「箱崎 58」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1373集)
佐藤一郎 2019 「6番箱崎遺跡—古代から中世にかけて」福岡市埋蔵文化財会員編『新鮮な福岡市考古学 特別編、自然と遺跡からみた福岡の歴史』 pp.242-247
黒松敏子 2018 「古代の畠地と土牢」九州史学研究会編『アジアのなかの多摩川・箱崎』勉誠出版 pp.24-35
下山正一 1998 「福岡平野の堀川と海溝と第四紀層」小林茂子編『福岡平野の古河岸段と福岡盆地-環境としての遺跡との共存のために-』九州大学出版会 pp.11-44
賀波政人 2008 「井戸・人気建物はかずら」(中村市) 博多を語る』海人社 pp.196-198
中尾祐太 2018a 「考古学からみた箱崎」九州史学研究会編『アジアのなかの博多港と箱崎』勉誠出版 pp.10-23
中尾祐太 2018b 「考古学からみた箱崎」九州史学研究会編『アジアのなかの博多港と箱崎』勉誠出版 pp.10-23
古田龍治 2014 「箱崎に生まれて」
山本信人 1990 「福岡トキの土器—櫛突き時代土器の輪郭と研究論文にせて」『九州土器文化論集』pp.349-386
山谷吉子編 2004 「箱崎18」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第812集)

表3 遺構一覧

遺構	番号	理上	上層・下層製品・地盤面	石	金屬	特記事項
SE 001	土層間(図5) 鉄釘。	井戸枠：白い粘土、堅い土、白い灰土。東京営渠系青磁面Ⅱ類、西海道面、白磁面、灰瓦面、灰瓦面、灰瓦面。生土・土被組、鐵方・土被組、井戸枠(ヘルア・ホ)、天日井、瓦面、青磁面、青白磁面、同安窯系青磁面、土被組、土被組。	鐵方：砂岩質石造片1、基石(合)1、造石質石造片1、月戸枠：造石質石造片1、全体：浮石質石造片2。			13世紀～14世紀か。井戸枠は3つ。
遺物	002	暗灰色砂、しまり有、炭化物含む。	炭化物質面。			
SK 003		暗灰色砂、しまり有、炭化物含む。	土被組、瓦面。			
SP 004		暗灰色砂、しまり有。	土被組、瓦面。			
SK 005		暗灰色砂、しまり有、炭化物含む。	土被組、青磁面、白磁面。			
SP 006		暗灰色砂。	土被組、瓦面。			
SP 007		黒色砂。	土被組(合)、土被組。			
SP 008		暗褐色砂+褐色砂。	土被組、瓦面。			
SD 009	未記入。		土被組(合)・灰(合)・灰、瓦質土器、瓦面。			
SP 010		鐵方：黒褐色砂、砂(合)黄砂が少額量状に混じる。	土被組、土被質土器、黒褐色陶地鉄。柱頭：土被層面、白磁面。			
SP 011	未記入。		土被組、瓦面。			SD009と同時に撮影。
SP 012	暗褐色砂、しまり有。		土被組。			
SK 013		黒色砂。	土被組、白磁面。			
SK 014	未記入。				小形打製品1。	
段F 015	黒褐色砂。	土被組(ヘラ・ホ)、土被質土器、瓦面。	東京営渠系青磁面、白磁面、青磁鉄錆盤、瓦面。同安窯系青磁面。	造石質石造孔製品1、造石質鐵方1、鐵方1、瓦塊1、		
SP 016	暗灰色粘土砂、炭粒を多く含む。	白磁面、土被組。		造石2、不明鉄製品3。		
SK 017	暗灰色粘土砂、しまり有、大めの砂粒を少額量含む。	青磁面、白磁面・瓦、土被組。				鏡の取り上げあり。
SP 018	暗灰色粘土砂、炭粒少額量。	土被組、瓦面。				
SP 019	暗灰色粘土砂。	土被組、前田系埋蔵土、土被質土器、瓦。		鐵打1。		近世。
段F 020	未記入。	土被組、土被質土器、瓦。				SPO18・019の「段F」。
SK 021	黒色砂、しまり有。	白磁面、瓦面。				
SE 022	土層間(図10) 参照。	井戸枠：土被組(合)、瓦面。	東京営渠系青磁面、白磁面。	月戸枠：造石質石造片1、造石質石造孔用鉢1、鐵方：粘土合子、青磁面、瀬戸・平尾、淡墨青花土性地、瓦面。	全体：鐵打3、瓦塊1、月戸枠：造石質石造孔用品1、全体：造石質石造片1、全体：浮石質淨片1。	015下で焼成。11世紀後半～12世紀前半か。井戸枠2つ。
SK 023	上層：暗茶褐色。下層：暗茶褐色、褐色。	土被組、白磁面、瓦面。				
段F 024	土層間(図12) 参照。	土被組、東京営渠系青磁面、白磁面。		造石質石造片1、輕石質淨片1。		SE025・026の焼成。
SE 025	土層間(図12) 参照。	白磁面(合)、東京営渠系青磁面、高麗陶地、瓦面。				024下で焼成。SE025を切る。
SE 026	土層間(図12) 参照。	土被組。				
SK 027	暗褐色砂(合)しまり有、土被組の互換。	土被組(合)・瓦面。		造石質石造片1。	鐵打2、瓦塊1。	12世紀中頃～後半。
SP 028	暗褐色砂。	土被組。				
SP 029	暗褐色砂、しまり有。	土被組。				
SK 030	暗褐色砂、しまり有。炭粒を多く含む。	土被組、瓦。				
SP 031	暗茶褐色。	土被組、瓦面。				
SP 032	黒色砂、しまり有。			造石質石造片1。		
SP 033	暗褐色砂。	土被組。				
SP 034	暗褐色砂。	土被組。				
SP 035	暗茶褐色砂。	土被組、土被質土器。				
段F 036	未記入。	土被組。				
SK 037	未記入。	青磁面、土被質土器、土被組。			鐵打2。	
SK 038	未記入。	土被組、瓦面。				
SD 039	暗茶褐色。	土被組、白磁面。				
SE 040	井戸枠：褐色シルト質土器、鐵方：青磁面。	井戸枠：白褐色シルト質土器、白磁面、白磁面、白磁面、青白磁面、瓦面。	井戸枠：土被組(合)・瓦面、土被組、土被質土器、淡墨青花土性地、全体：白磁面、瓦面。	鐵方：浮石1、造石質石造片1、月戸枠：浮石1、造石質石造片1、全体：鐵打2、不明斷製品、月戸枠：不明鉄製品1、鐵方：鐵打1。		全体：鐵打2、不明斷製品、月戸枠：土被組はヘラ切り上塗。
SP 041	灰褐色砂。	土被組。				
SP 042	暗褐色砂。	土被組。				
SP 043	暗褐色砂。	土被組、土被質土器。				
SP 044	暗褐色砂。	土被組。				
SP 045	未記入。	土被組。				
SP 046	未記入。	土被組。				
SP 047	未記入。	土被質土器。				046番。
SP 048	未記入。	土被質土器。				
SD 050	未記入。	土被質土器、瓦質土器。				
SP 051	未記入。	土被質土器、白磁。				青あり。
SK 052	未記入。	瓦。				
SK 053	未記入。	瓦。				
SD 054	黒褐色砂。	土被組、瓦面、白磁。				
SP 055	暗褐色砂。	土被組、土被質土器、瓦面。				
SP 056	暗褐色砂。	土被組。				
SP 057	暗褐色砂。	土被組。				
SP 058	黒褐色砂。	土被組、瓦面。				
SP 059	暗褐色砂。	土被組、瓦面。				
SP 060	未記入。	土被組、瓦面。				
SP 061	未記入。	瓦面。				
SP 062	黒褐色砂。	瓦、瓦面。				
SP 063	暗褐色砂。	土被組、白磁。				
SP 064	黒褐色砂。	土被組。				
SP 065	未記入。	ダマス人形。				
SP 066	未記入。	瓦面、土被組。				

SP_067	未記入。	瓦頭廻、土御頭廻。				
SP_068	未記入。	瓦頭廻。				
SP_069	未記入。	土御頭廻、瓦頭。				
SP_070	未記入。	土御頭廻、瓦頭廻。				
SP_071	未記入。	土御頭廻、瓦。				
SP_072	未記入。	土御頭廻、瓦頭。				
SP_073	未記入。	土御頭廻。				072 下面で検出。
SP_074	未記入。	土御頭廻、瓦頭廻頭。				
SP_075	未記入。	土御頭廻、土御頭廻上頭、瓦頭。				
SP_076	未記入。	瓦頭廻、瓦頭廻。				
SP_077	未記入。	土御頭廻、瓦頭廻。				
SP_078	未記入。	土御頭廻、瓦頭廻。				
SP_079	未記入。	瓦頭廻、土御頭廻、瓦。				
SP_080	黒陶色砂。	瓦頭廻、土御頭廻。				
SP_081	未記入。	瓦頭廻、土御頭廻。				
SP_082	暗褐色砂。	土御頭廻（ヘラ）。				
SK_083	上層：暗褐色～褐色砂 灰褐色砂ブロックを少量含む。中層：黑色砂。下層： 暗褐色砂・褐色砂。	白頭廻、土御頭廻（角・ヘラ）。	滑石製石繩片 1. 石片 1.	鉄針 1.	SK083 合む。	
段下_084	未記入。	土御頭廻、土御頭廻上頭、瓦頭廻、白頭廻、瓦頭廻、瓦頭廻、瓦、瓦頭廻。	滑石製石繩片 2. 石片 1.	鉄針 1.		
SE_085	未記入。	片付 2 : 白頭廻、黄褐色砂。瓦頭、瓦頭廻上頭、候方 : 土御頭廻、白頭廻、瓦、全体 : 土御頭廻（ヘラ・角）、白頭廻、瓦頭廻上頭、瓦頭廻片 1.	滑石製石繩片 2. 滑石製石 片 1.	鉄針 1. 鉄針？ 1. 鉄洋 1. 鉄針 1.		
SP_086	灰色砂。	土御頭廻。				
SP_087	未記入。	土御頭廻、瓦頭、白頭廻。				
SP_088	黒陶色砂。	土御頭廻。				
SP_089	暗褐色砂。	白頭廻、土御頭廻、土御頭廻上頭。				
SK_090	上層：暗褐色砂。下層： 褐色砂點砂。	土御頭廻、瓦頭廻上頭、白頭廻、 褐色砂點砂。			鉄針 1.	
SP_091	未記入。	土御頭廻。				
SD_092	黒陶色砂。	土御頭廻上頭。				
SP_093	未記入。	瓦頭廻、土御頭廻。				
SP_094	未記入。		鉛石。			
SP_095	未記入。	土御頭廻。				
SK_096	未記入。	土御頭廻上頭、黃鐵鉱結晶。白頭、青頭、瓦頭廻上頭、平瓦・丸瓦。	鉛石製淨 1.			
SP_097	未記入。	土御頭廻。				
SP_098	未記入。	黑色砂・瓦頭、土御頭廻。	滑石製石繩。			
SP_099	未記入。	土御頭廻、瓦頭廻。				
SK_100	未記入。	白頭廻、瓦頭廻、土御頭廻（角・ヘラ）。		鉄針 1.		
SP_101	未記入。	土御頭廻。				
SP_102	未記入。	瓦頭廻上頭、土御頭廻。				
SP_103	未記入。	土御頭廻、瓦頭廻。				
SK_104	黒褐色砂～褐色砂～褐色砂に シレーズ状理構。	白頭廻 V -Aa 型、土御頭廻、瓦頭廻、褐色砂。	鉄塊 1.	12世紀中頃～後半。		
SP_105	未記入。	土御頭廻、白頭。				
SP_106	未記入。	土御頭廻。				
SP_107	未記入。	土御頭廻。				
SX_108	暗茶褐色砂 1 個。暗灰色 粘土砂層中に混入。	礫岩塊 7. 白頭廻、瓦頭廻上頭應。土御頭廻・純、瓦頭廻。	砾石（白）。			
SK_109	灰色砂（しまり弓）王 体。一部下層は暗茶褐色砂 のところあり。	礫岩塊 8. 白頭廻、瓦頭廻、瓦頭廻上頭應。黑色土御頭廻、反頭廻。 土御頭廻、平瓦・丸瓦。		鉄塊 1.	SD009 の続きか。	
SE_110	未記入。	土御頭廻、純、瓦頭廻。	滑石製石繩片 1.		014 に切られる。	
段下_111	未記入。	土御頭廻、土御頭廻上頭、瓦頭廻上頭、瓦頭廻上頭、粉青沙頭廻、白頭、 青頭。	滑石片 1.		108・109 の一段下。	
SK_112	未記入。	ビン、瓦頭廻上頭、タルマ土人形、瓦頭廻。		鉄針 3.	一部に壊乱の遺物を含む。	
段乱_113	未記入。	梁付瓦、土御頭廻、瓦頭廻。		鉄針 3.		
SP_114	未記入。	土御頭廻、瓦頭廻。		鉄針 3.		
SP_115	未記入。	土御頭廻（ヘラ）、瓦頭廻、平瓦。				
SK_116	上層：暗茶褐色砂。下層： 白色砂（灰土体で、炭粒 少部分含む。）	瓦頭廻上頭。	砂岩質石片 1.	116 段辺の段下げ。		
段下_117	暗茶褐色砂。	白頭廻、土御頭廻、瓦頭、土御頭廻上頭。	基石（黒）。			
SP_118	未記入。	土御頭廻。				
SP_119	未記入。	土御頭廻。				
SP_120	未記入。	土御頭廻上頭、瓦頭。				
SP_121	未記入。	瓦頭。				
SP_122	未記入。	瓦頭。				
SP_123	未記入。	土御頭廻（ヘラ）、瓦頭廻。				
SP_124	未記入。	土御頭廻。				
SP_125	未記入。	土御頭廻、黑色土御頭廻。				
SP_126	未記入。	土御頭廻。				
SP_127	やや暗褐色砂。	瓦頭廻、土御頭廻。				
SP_128	未記入。	土御頭廻。				
SP_129	未記入。		鉛石。			
SP_130	未記入。	白頭廻。				
SP_131	未記入。	土御頭廻上頭。				
SP_132	未記入。	白頭廻、瓦頭廻、土御頭廻。				
SP_133	未記入。	瓦頭、土御頭廻。				
SP_134	未記入。	土御頭廻。				
SP_135	未記入。	瓦頭。				
段乱_136	未記入。	初期陶頭廻、瓦頭廻上頭。				
SP_137	未記入。	瓦頭。				
SP_138	未記入。					
段乱_139	未記入。	タルマ土人形、梁付瓦、瓦、土御頭廻、瓦頭。				
SE_140	未記入。	片付 1 : 土御頭廻（角）、瓦方 : 土御頭廻・純、瓦頭廻。				
段乱_141	未記入。		節松幼株種子 1 ヶ所。			

写真図版



Ph.6 調査区全景（南西から）



Ph.7 調査区全景（南西から）



Ph.8 SE001 完掘状況（北から）



Ph.9 SE001 井戸枠（北から）



Ph.10 SE022 井戸枠2（東から）



Ph.11 SE022 完掘状況（南西から）



Ph.12 SE025・026 (北から)



Ph.13 SE040 完掘状況 (東から)



Ph.14 SE040 井戸枠 (東から)



Ph.15 SE085 井戸枠 (北西から)



Ph.16 SE085 完掘状況（北西から）



Ph.17	Ph.18
-------	-------

Ph.19	Ph.17 潛石製鍤集合 Ph.18 軽石製浮集合 Ph.19 玩具集合
-------	--



Ph.20 1

Ph.21 62



Ph.22 97

Ph.23 114



Ph.24 135



Ph.25 133



Ph.26 145

報告書抄録

ふりがな	はこざき 61							
書名	箱崎 61							
副書名	箱崎遺跡第 97 次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 1426 集							
編著者名	神 啓崇（編） 小林 克也							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2021(令和3)年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
箱崎遺跡	福岡市東区箱崎 一丁目 2535、2534、2560	40131	2639	33° 37' 3.4254"	130° 25' 29.0818"	2019(令和元)年6月17日 — 2019(令和元)年8月9日	256	店舗建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
箱崎遺跡	集落跡	中世	井戸/土坑/溝/柱穴		土師器/瓦器/陶磁器/金属製品/ 石製品			
要約	箱崎遺跡は博多湾岸の砂丘上に立地し、中世を中心とする遺跡である。本調査区は遺跡の北東に位置し、11世紀後半から12世紀代を中心とする井戸・土坑・溝・柱穴を検出した。井戸は調査区半分以上の面積を占め、当地の土地利用として井戸が主体をなしていたとわかる。							

箱崎 61

—箱崎遺跡第 97 次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1426 集

2021年3月25日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8-1
印 刷 祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南 4 丁目 15-17

